
らんでぶー（仮）

オムラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らんでぶー（仮）

【Nコード】

N9939Q

【作者名】

オムラ

【あらすじ】

ちよつとオタクでおデブちゃんな女とちよつと変で美形な男のラブコメ（予定）
完全見切り発車小説です。

プロローグ（前書き）

完全見切り発車小説

続くのかもわからない

自己満足小説

ブローグ

今、私こと神崎^{かんざき} 美保菜^{みほな}は会社の飲み会の席に居る。

私が所属する総務課と、営業課の合同飲み会である。何故この二つの部なのかと言うと、課長同士の仲が良いからである。それだけ。営業課は言わずもがな花形部署であり、そしてその社員の方々も男女問わず魅力的な人が多い。

特に営業課の過半数を占める男性陣は、それはもうおモテになる。見た目が良い人も多く、また若手の独身者は将来有望でもある。

定期的に行われているこの飲み会がきっかけで結婚に至った総務課と営業課のカップルがいたという前例もあり、総務課の肉食系女子は気合い入れまくりでこの会に参加している。

今も営業課の若手を総務課の女性が取り囲むようになっていて、皆さん楽しそうに盛り上がっている。

営業部の中でも一番人気があるのは佐々良^{ささよし} 暦^{れき}、26歳だ。整った優しそうな顔立ちで、柔らかそうな茶髪。身長は高く、またスポーツをやっていたらしく体つきも良い。さらに性格は温厚で、皆に優しい。これでもかと言うほどに少女漫画的ヒーローの要素を盛り込んだ人を、私は彼以外知らない。現在何故か彼女がいなく、今も彼の周りには女子が犇^{おなこ}めいている。流石に彼も、疲れを隠せないよう度（一時も止むことのないアプローチ攻撃故）若干その麗しいお顔が引き攣^{ひきつ}っているようだ。

ちなみに、私はその盛り上がっているグループには入っていない。部長含むナイスミドルたちのグループでしっぽりとお酒を嗜んでいる。焼酎マジうまい。

元々どちらかと言うと大人しい方で、皆でワイワイするのは少し苦手だ。故に、あちらの盛り上がっているグループには混ざらない。それに私は彼女らのように積極的に殿方と絡みたいとも思わない。身の程を知っているからだ。

私の容姿は一言で言うならばおデブちゃんである。物心ついた時から他の子と比べると少し大柄だった。

自分の容姿を気にし始めた頃、ダイエツトに取り組んだが元々太りやすい体質らしく、少し気を抜くとすぐ元通りを繰り返すうちに、諦めてしまった。

太くても生きていける！生きていけるだけで素晴らしい！と、いうわけではおデブちゃんである。

時々世間の目が痛いこともあるが（実際総務課の一部には冷ややかな目で見られている）、今ではもう慣れてしまった。

世の中にはおデブちゃんが好きと言うひともいるみたいだが、あくまでマイノリティー。

それに、過去に色々あったので異性と付き合いたいか結婚したいとかあまり思えないのだ。

と、いうわけで私は営業課争奪戦からは早々に離脱している。

そして私は落ち着いた、大人の会話をする部長たちの輪に入らせてもらっている。

お酒を注ぎながら、ずっと会話に集中していたので私は気がつかなかった——あの視線に。

変化の訪れ（前書き）

勢いで書いたデス

変化の訪れ

それはいつもの飲み会と変わらないはずだった——そう、だったのだ。

「どうした佐々良、あつちに戻らなくて良いのか」

「たまには部長たちに混ざりたいんですよ、駄目ですか」

「いやいや俺たちや構わないんだが、あつちのお嬢さんたちはさぞかしがっかりするだろう」

「ははは」

はははじゃないですよ、お兄さん。貴方は爽やかにしていますよ、あちらのお嬢さんたちからの視線を感じないのですか。ああそうですか、私が壁になって当たらないんですねわかります。

何故、お隣のグループからのチクチクした視線を浴びなければならぬのか。それは全て、今現在何故か私のお隣に座っていらつしやる佐々良氏が原因である。

突如としてナイスミドルグループの元に現れた佐々良氏は、私と総務部長もとい夏木部長の間に入り込んできた。

これまで何回も合同飲み会が行われてきたが、初めてのことである。

「神崎さん、迷惑だった？」

ええそりやあもう！なんて答えるほど私は冷酷非道な人間ではない。少し俯いていたのを佐々良は機嫌が悪いと解釈したらしく、ちよつと困った感じの顔で私の顔を覗き込んでいた。

うつん。冷酷非道な人間であっても、この捨てられた犬のような雰

困気を醸し出していたらちよつと躊躇うだろうな。容姿が優れているってスバラシネ。

「そ、そんなことないデスヨ」

「そう？」

「こら、神崎さんいじめんなよ。お前と違って純粹なんだから」

「…それどういことですか」

噛んだ上に棒読みになってしまった私の台詞がうまい具合に流れていった。夏木部長ナイスです！

いつ戻るのかと期待していたのだが、佐々良氏は中々戻ることなく、飲み会は終わりに近付いていた。

飲み会は終始、課長たちと佐々良氏の会話が中心であつて、私はそれを聞きながらも隣から時折感じる視線に耐えていた。

「そろそろお開きにしようか」

営業部部长、上巻部長あけまきの声に、疲れがどつと出たような気がした。漸く終わる。長かったようでまじで長かった。

そういえば今は何時なんだ。そう思った私はメールチェックついでに時間を確認しようと携帯を取り出した。

うん、1時間弱よく耐えられたな私。自分で自分を褒めてみたけどそれで疲れが取れるわけでもなく。早く帰って寝よう。

「神崎さん……」

「はいっ」

未だ私の隣にいた（すっかり失念していたが）佐々良氏に不意打ち

で話しかけられ、すこし声が裏返ってしまった。

…今更だが佐々良氏は私の名前を知っていたのか。今まで話したことなかったような気がするのだけど……。あ、そうか私が悪目立ちしているからか。納得納得。

「ごめん、見るつもりはなかったんだけど…」

「はい？」

「携帯の壁紙……」

私の携帯の壁紙は、某携帯ゲームの学園RPGで出てくる学園のエンブレムだ。ちなみにこのゲーム知る人ぞ知ると言えばかつこいいが、率直に言えばマイナーな作品である。マイナーと言っても決して人気がないわけではなく、シリーズ化されているくらいだ。（ん？それでは知る人ぞ知るとい言葉でも合っているのか？）

私はこの作品がとても好きで、ほとんどのシリーズを持っている。そう、ほとんどなのだ。残念なことに第一シリーズだけ持っていない。以前一度だけオークションで見たことがあるのだが、驚くほどの高値で泣く泣く諦めた。

ついつい語ってしまったが、とにかく私の携帯の壁紙は大好きなゲームに出てくるエンブレムなのだ。
それがどうかしたのだろうか……

「…CISだね？」

「！？」

佐々良氏の口からその名が出るとは一体誰が思っただろうか、否思わないだろう。

CIS、それは私が愛してやまないゲームのタイトルだ。

変化の訪れ（後書き）

動き始めたマイレボリューション

自然な流れ？（前書き）

C r i m e I n S c h o o l ときどき

会話がいつぱいです

自然な流れ？

「佐々良さん…CISをご存じなんですか」

「うん。やっぱりそれ、学園のエンブレムだよね」

うん、と言いましたかまじですか。正直信じられないです。だって、これはおそらく結構なマニアじゃないと知らない作品なんですよ。つまり佐々良さんもオタクってことですか。え、残念なイケメンって本当にいるんですか都市伝説じゃないんですか。

「俺もCIS好きなんだ。」

「ほ、ほんとうですかっ」

「本当だよ」

わー言い切ったよ、この人！本物だ！

「私もCIS大好きなんです！」

今までリアルでCIS好きという人と会ったことがなかったために（ネット上でならある）、テンションが急上昇している。基本ローテンションな私がこうもテンションマックスになるのは相当珍しいことだ。

勿論会社でこんな風になることなど全くなく、佐々良氏も驚いているようだ。

しかしここは飲み会の席。つまり私もアルコールが入っている。弱いわけではないが強いわけでもないために、普段なら稼働する「自重」というシステムが麻痺してしまっていた。

「私は特にシリーズ4が好きなんです」

「ああ、ラストエンペラーね」

「そうです！ストーリーは勿論ですけど、キャラクターも魅力的でしたよねあれは」

「わかる。俺、全シリーズの中で一番好きなのがユキネなんだ」

「ユキネちゃん可愛いですよ！あそこまでニーハイが似合う子は中々いません！けど私の一番のお気に入りにはカズト君です」

「男の娘」

「そうです！」

「良いね、けど第一シリーズも好きだな」

「第一シリーズ！プレイしたことあるんですか」

「うん。発売当初に買ったからね。歴だけは長いよ」

「すごい！私、第一シリーズ未だにプレイ出来てないんですよ。中々手に入らなくて……」

「俺の貸すよ」

「っ良いんですか？」

「勿論」

「ありがとうございます！」

「あ、明日は空いてる？」

「え、あ、はい」

「じゃあさ、一緒にプレイしない？二人プレイ、したことある？」

「ないです！ぜひ、お願いします！」

「メアド交換しよう、連絡するから」

「はいっ」

「後で詳細送るから」

「了解しました！」

先ほども申しあげましたとおりこのとき私のテンションはマックスで、アルコールが入っておりまして、周りが見えておりませんでして。

だから――佐々良氏の目に今まで見たことのない色があったことも、約一名殺気立った視線を向けてくる人がいたことも気がつかなかったのである。

自然な流れ？（後書き）

ほぼ会話なうえに短いですね

待ち合わせ

「……これってまるでデートじゃない？」

そう呟いたのは、土曜の午前九時。某駅前であつた。

金曜日の飲み会の後、帰宅した後に佐々良氏とメールのやり取りをした。その結果が土曜の午前九時に駅前で待ち合わせ、である。長年恋い焦がれていたゲームをプレイ出来ることに浮かれきっていた私は、此処に来てようやっと我に返つた。どんだけ。妙齡の男女が仕事抜きに、休日二人きりで会う。これ即ちデートではなからうか。こういった方面にはとことん疎く、経験値が皆無であるために判断が出来ない。誰か玄人さん助けて！

「神崎さん、ごめんね。待つた？」

ササラがあらわれた！

どうする？

> こうげき

> ぼうぎょ

> にげる

3で！

「神崎さん？」

ゴメンナサイ、嘘です。

「あ、いえ、今着いたばかりなので大丈夫です」

ひーなんだこれ。どっかのマンガで見たことあるこの流れ！

「良かった、じゃあ行こうか」

…爽やかな笑顔いただきました。

ごめんなさい。デートとかふざけたこと言っちゃってしまっでごめんなさい。そうですね、鏡見てみるって話ですよ。全くその通りです。だからお嬢さん方、そんなに痛い視線を向けないでください！刺さるような視線から逃れるように、小さくなりようがない身体を可能な限り小さくさせて歩いているこの状況。

原因は言わずもがなお隣を歩いている殿方である。

いやー確かに美形だとは思っていたけど、会社でもモテるのはわかっていたけど、ここまでとは思いませんでしたよ！道を歩けばすれ違う女性がほぼ佐々良氏に熱のこもった視線を向ける。すごいね。

そして、次に佐々良氏の隣を歩いている私に目を向ける。……おいおいお嬢さん、その眉間の皺はいただけじゃないよ。気持ちはわかるけどね。

やっぱり美男の隣は美女がお似合いですよね。ごめんなさい、こんなおデブちゃん。でもデートじゃないので安心してください。

「神崎さん」

頼むからそんな爽やかな笑顔を向けないでください。視線の殺気が20%増量しましたよ。

「どうぞ」

素敵男子佐々良氏はそう言いながら、車の助手席のドアを開けていた。え、車？

「…そういえば、どこでプレイするんですか？」

「着いてからのお楽しみってことで」

……何だろっこの有無を言わせぬ感じの笑顔は。私はその笑顔に押されるように、そして実際佐々良氏の手に背中を押されて、車の中に入れられたのであった。

頭の中で流れるBGMはドナドナでした。

待ち合わせ（後書き）

どなどどーな

自宅訪問（前書き）

タイトルセンスの悪さには目を瞑ってください

自宅訪問

「ちょ、駄目です！そそこは駄目！」

「隙を見せるそっちが悪いんだよーほらほら」

「あっ」

車で連れられてきた場所は、佐々良氏の自宅マンションだった。流石出世頭、住むところがまるで違う。

最初は戸惑いましたよ、やっぱり。佐々良氏の自宅にお邪魔したことが会社のお姉さま方にはれたらと思うとぞっするし。だがしかし、CIS第一シリーズの誘惑には勝つことができませんでした。無念。

あ、言わなくても分かっているでしょうが敢えて言いますと、私たちはゲームをしています。二人対戦プレイです。勘違いしたら佐々良氏に失礼ですよ。

それにしてもCIS第一シリーズがネ申だという噂は本当だったことが明らかにされたことは大変喜ばしい。そして二人プレイも本当に面白い。このゲームは面白さが無限大だな！

「うー、また負けてしまいました！強すぎですよ、どんだけやり込んでいるんですかー」

「この初代からずーっとやっているからね。でも神崎さんも中々だよ」

佐々良氏は本物であった。まさしく本物。そうとうやり込まないと到達できない領域に達している。私自身も達していないレベルである。甘く見ていた…。

しかもCISに限らず、佐々良氏は中々マニアックな趣味の持ち主だったらしく私が知らないような一品も所有していた。

本人曰く、「マイナーな神ゲームを発掘するのが趣味」だそうだ。乙な趣味である。

今まで遙か遠い天空の人という印象だった佐々良氏だったが、この趣味は親近感がわく。

しかし……

「ん？どうした、神崎さん。疲れたかな」

「いえ、」

「そろそろ休憩にしようか。お茶でも良い？」

「どうぞお構いなく…」

美形だよなーこの人。改めてと言うか今更ながらそう思う。

今まで遠くから見えていて、そのキラキラオーラに圧倒されていた。

しかし今日こうやって初めて一対一で正面から見ることで、佐々良氏の御顔が実に端正であることに気付かされた。すっきりとした輪郭、少し垂れ下がった愛嬌のある眼、スツと通るような鼻、口角の上がった薄い唇、そしてさらさらの黒髪。これで眼鏡があったら完璧、って私情を挟んでしまったすみません。

やっぱり雲の上の人なんだよな、あの人は。というか人種が違う。何で人ってここまで違うんだろうね。天と地の差とはまさにこのことだわ。

「はい、玄米茶」

「あ、ありがとうございます」

お茶を持ってきてくださった佐々良氏は、それまで座っていた私の正面ではなく、隣に座ってきた。
何故？

ピッ

佐々良氏はリモコンでテレビをつけた。あ、成程。前のままの席だとテレビ見られないものね。成程。
肩が触れているのも私の肩幅が肉のせいで広いからだよね。成程。

佐々良氏の両腕が私の体に巻きついてるのは……暖をとるためですかね。成程？

自宅訪問（後書き）

なるほど

マニアックな趣味（前書き）

いったん終了

マニアックな趣味

あれ？どうゆうこと？

「ごめん、我慢出来なかった……」
「へっ！？」

佐々良氏の腕が私の肉に食い込むのではないかと思うほど強く巻きついてきた。

あれ、もしかしてこれプロレス技かな？

「ぐ、ぐるしっ」

「あ、ごめん」

「げほっ」

佐々良氏は腕を緩めて、背中を摩ってくれた。ありがたいけれど、いつまで暖をとっているつもりなのだろうか。そろそろ良いんじゃないかな。

「んぎゃっ」

突然の奇怪な声、失礼しました。いや、だってね、何か耳にね、生暖かいものが、ってまたっ！？

「ちょ、佐々良さん、一体何をつ！？」
「……神崎さん、良い？」

「だから何がっ！！??」

わけがわからない。わけがわからない。

何故佐々良氏の手が私の肉を撫でるように弄っているのか。佐々良氏の口元が私の耳元にあるのか。佐々良氏の息が若干荒いのか。わからない。わからない。

そんなことされる意味が、わからない。

「ふんぬおっほー」

「おわっ」

未だかつてないほどの奇怪な掛け声を出して、私は佐々良氏の体を突き放した、というか投げ飛ばした。そこらへんの骨っぽい女の子よりは力があるんだよっ！

「いいかげんにしてくださいっ」

デブをからかうなんて趣味の悪いことを。

「騙されんでも思っただんですか」

私は知っている。

「私みたいなデブでブスでオタクな女を、」

好きになるような、

「マニアックな趣味を持っている男がいるなんてっ！」
「いるよ」

……へっ？

「な、何を、言って」

というかここはシリアスな場面であって、今から昔の回想で男子から容姿のことで散々言われ続けて傷ついてだから信じられないのよ！
！っていう真相が初めて明かされる流れになるんじゃないの？
もう流れで言っちゃったけど！

「正直神崎さんを好きなことがマニアックだと言われる理由がわからないんだけど、神崎さんのことが好きな奴はここにいるよ」

「は、」

「身体は柔らかくて最高の抱き心地だし」

「ひ」

「低くて小さな鼻は可愛いし」

「ふ」

「俺と趣味はばっちり合うし」

「へ」

「大好き」

佐々良氏の顔は、今までに見たことのないほどに甘いものだった。ただでさえ甘い顔立ちなのに、それ以上で。その衝撃的な攻撃に私のHPはゼロになった。

しかし佐々良氏は一度離れた身体を再びひつつけた。加えてその甘ったるい顔も近付いてくる。やめて！HPはゼロよ！

すっかり力が抜けきった私の何色にも染まっていなかった唇は、あっさりと奪われたのでした。

よぎる不安（前書き）

みじかいよ

よぎる不安

「どうしても？」

「どうしても！」

甘えるように上目遣いで見てくる佐々良氏を振り切って、玄関へ向かう。

靴を履いている間もずっとどこかしらを触ってくる。さっきからずっとこうなのだ。私の唇をあっさり奪ったかと思ったら、再び私を腕の中に入れて、ずっと私の全身を弄っている。

最初は抵抗していたものの、力が抜けきった私の抵抗など微々たるもので。諦めの境地に入りました。はい。

それに、何と言うか……いやらしい感じ？もなかった、と言うか。

接吻以外は、大型の動物に接しているような感じだったんですね。うん、私大型動物。

しかし、日も暮れてきてそろそろ帰りたいと思い始めたときでした。佐々良氏とはんでもないことを言い始めたのです。

「今日、泊っていくよね？」

どうして既に決まっていることを確認する感じなのかな？

それまでのペットへ向けたような眼差しが隠れ、少し怪しい色が見え始めた。さらに手つきも怪しい動きをし始めた。流石の私でも、まだ完全に佐々良氏の言う私への好意を信用しきっていない私でも、これには危機を察知した。

と、いうことで、キャラが完全に崩壊した佐々良氏を振り切つていざ日常へ！

「って何で居るのですか佐々良さん！」

さようなら非日常、ただいま日常！ってな感じで佐々良氏の自宅から意気揚揚と出てきたのに。

何故非日常の主な原因である佐々良氏がすぐ横に居るんだ！

「何でって、神崎さんが心配だからだよ。」

「心配なさらなくても大丈夫です」

「ちゃんと自宅まで送り届けるから安心して」

……なんか不安になってきた。

笑顔の脅し（前書き）

みじかいよ
ぱーとっー

笑顔の脅し

私の不安を知ってか知らずか佐々良氏は強引に自身の車（よくわからんが高そう）に私を乗せて、出発した。

10分も経たないうちに着いたのは、今朝私たちが待ち合わせた駅だった。

「さて、ここから何処へ向かえば良いのかな？」

「……ここまでで良いです」

「言わないのなら俺の家に戻るけど」

笑顔で脅されたなう。

渋々自身の住所を伝えると佐々良氏は「了解」と、爽やかな笑顔で応えた。

「じゃあ一番近いスーパーはやまびこMAXだね」

「あ、はい。よくご存じで……」

「友人の家が結構近いんだよ」

「……そうなんですか」

Q・事実なのだろうけれども、疑ってしまいそうになるのはどうしてでしょうか。

A・今日一日の佐々良氏の行いのせい

それにしても何故スーパー？

「今日の晩御飯の材料、買わないとね」

「そう、ですね」

今日これから晩御飯の材料買いに行くとか言っただけ？
違和感を覚えながらも、それを口に出さないまま、気がついたらや
まびこMAXに到着していた。

笑顔の脅し（後書き）

実在するスーパ―とは一切関係ございません
実在するかは知りません

空耳ですか？いいえ現実。（前書き）

やまびこMAX店内。

空耳ですか？いいえ現実。

「今日の晩御飯のメニューは？」

「（いろいろ疲れたのでお手軽な）カレーです」

「俺ポークカレー好き。あ、今日豚安いみたいだよ」

「そうみたいです」

「……ふふっ、何かこうしていると夫婦みたいだね」

背中がゾツとした。

今日の佐々良氏の言動を省みての寒気にプラスされて、周りの方々（あれ？女性に交じって男性もいる気がする）からの視線が痛すぎる。

すごい理解はできますよ。他の人とは明らかに違うオーラを放っている美形が頬を若干赤らめて見つめている相手ってのが、醜いおでぶちゃんなんですもの。そりゃあなんでてめえが、ってなりますよね。わかります。あなた方の気持ちはすぐわかるのですが、佐々良氏の気持ちはさっぱりなもので。どうしようもないんですよ。ヘルプミ！。

「美保菜ちゃん、ポイントカード持ってる？」

「へっ！？あ、はい」

財布からオレンジ色のやまびこMAXのカードを取り出す。すると佐々良氏はそれを私の手から抜き去り、レジのおばちゃんに差し出

した。

って、レジ！？

籠の中にはちゃんとカレーの材料が入っている。

いつの間に入れて、しかもレジに並んでいたんだ。

どれだけの間視線から逃れるべく現実逃避していたのだ自分。

「はい、ありがとう」

「わっ、あの、いくらでしたか。ちゃんと払います」

「いいよ。どうせ俺も食べるんだし」

「……」

え？今なんて？

空耳ですか？いいえ現実。
(後書き)

さりげなく名前呼び。

励ましの一声

かかん、と、二人分の足音が重なって響いている。

場所は私の住むアパートの1階から2階へ続く階段である。

二人分。そう、私と佐々良氏の二人だ。

スーパ―からどうにか一人で帰ろうとしたが、私より佐々良氏のほうが一枚上手で、逃走を阻まれてしまった。

気がつけばすでに自宅。残るチャンスはあと一回。

最後に頭の中でシュミレーション。

鍵を開ける。素早く入る。素早く鍵を閉める。

なんて単純！

我が家の扉の前に着き、一つ深呼吸をする。

いざ、決戦の時！

がちゃ、

「あ、美保菜ちゃん、あれは！」

「え！」

突然佐々良氏が叫び、何事かと振り返る。佐々良氏が示す方向を見ると……アパートの向かい側にある大家さんの家で飼われている豆^{ドールマン}太が、すごい勢いで水を飲んでる姿があった。

確かにあのドールマンは恐ろしくて、水を飲む姿も鬼気迫るものを感じてより恐ろしいけれども……。

「あのドーベルマンは大家さんちの飼犬で…」

隣にいた佐々良氏を見上げるつもりで振り返ると、さっきまでそこにいたはずの佐々良氏はそこにはいなかった。

「おじゃましてまーす」

半開きの扉から聞こえてくる佐々良氏の声。

扉が完全に閉まった時、タイミング良く豆太の鳴き声が聞こえた。

「ウワンッ！（どんまい！）」

素直もすぎるとただの馬鹿

「あの、佐々良さん、何で家に入っているんですか」

「夕食御馳走してくれるんでしょう？」

「え、そんなこと一言も言っただけ」

「俺、お昼御馳走したよね」

「……はい」

そうだった。佐々良氏は自宅で手料理を振舞ってくれたのだった。具沢山の炒飯と餃子とワカメスープという中華料理を。シンプルでありながらもとても美味しかった。

今このような状況になるとわかっていたら、あそこでがつついて食べなかったのに……。いや、けれどもあんな美味しそうな匂いを嗅ぎながらもそれを拒否するなんて、食い意地の張った私には無理だ。はっ！これが彼奴の作戦だったのかっ……謀られた。

「……じゃあ、夕食食べたら帰ってくださいね」

「んー」

……意地でも帰す！

手伝うと言ってきた佐々良氏を断って、代わりにCISをしていて

もらった。ちなみに第2シリーズ、「闇夜に浮かぶスーパームーン」である。

そのBGMを聴きながら、カレーを作った。

本当ならもつと煮込みたいところだけど、そんなことをしていたら恐ろしいことが起こるような気がして、すぐに完成したカレーとサラダをテーブルに持っていく。

「佐々良さん、完成しましたよ」

ちなみにカレーの量は同等です。可愛い女の子だったら、殿方のほうは多くて自分の少ないにするのかもしれないけれど、私は違います。

「さあ、どうぞ！さつと食べてぱつとお帰りください！」

「はいはい、ちょっと待ってね」

「あれ？それって第2シリーズですか？」

佐々良氏がやっていたのは第2シリーズだったはずなのだが、テレビの画面に映るのは見たことのない面であつた。

第2シリーズではないし、他でも見たことがない。でもキャラクターは完全に見たことのある、第2シリーズのキャラクターである。

「ああ、これ隠しだよ」

「え！？隠しなんてあるんですか！？」

「うん。あんまり知られていないみたいだね」

「どうやったらいけるんですか？」

「まあまあ、とりあえず夕食にしようよ。その後でゆっくり教えてあげるから。」

「はいっ！」

「この時の私を「馬鹿」という言葉以外で表すことはできません。」

素直もすぎるとただの馬鹿（後書き）

時事ネタ

変態紳士佐々良

「そろそろ止めところ」

「ええ……」

「休憩はさみながらとはいえ、今日はずっとゲームばかりだっただろう。止めところ」

「……はい」

時計を見ると、もう日付が変わりそうな時間であった。

確かにやりすぎたな。今すぐ眠いし。いくら休憩を挟んでいたとしてもこんな時間まで……あれ？

食事前の私の決心は何処いった？

うわーつついゲームに釣られてすっかりしちゃっていた！

なんてことを思っていたら、すぐ後ろに人の気配。逃げようとしてももう遅かった。

あっという間に捕まえられた。

「……離してください、佐々良さん」

「嫌だ」

「……」

「ああ……柔らかい。気持ちいい」

変態的な言葉を吐く佐々良氏。普段の紳士然とした態度が嘘のようだ。というか嘘であった。

抵抗するも、前の時より力が出なくて振りほどけない。
故に佐々良氏の暴走は止まらない。

「ちょ、どこ触っているんですか！」

「おなか」

「馬鹿正直に答えろって言ってるんじゃないんですよ！離してください」

「無理」

「なっ」

贅肉を握られ、あまりの羞恥故に顔が赤くなるのがわかる。佐々良氏はそれに気付いたらしく、笑う気配がした。

笑いやがったこいつ。

イラッとして、体を揺すって何とか佐々良氏の腕の中から脱出しようとした。

ふんぬー！

「さっきは油断したからね、今回は逃がさないよ」

「ひっ」

「あれ、どうしたの震えちゃって。ふふふ、可愛いなあ」

「(g k b r)」

結局、私は変態紳士佐々良から逃れることは出来なかったのだった……。

変態紳士佐々良（後書き）

時間かかったわりには微妙ですね

肉食動物

「はっ」

目を開けると、そこにはいつも通りの天井があつた。時間を確認すると朝の9時を少し過ぎている。テーブルの上にはゲームのコントローラーが乱雑に置いてある。

昨日夜中までゲームをして、そのまま寝落ちしたパターンだ。いたっていつも通りの、休日の朝だ。

何だじゃああれは夢か。一晚中ずっと抱きしめられたまま離してくれなくて現実から逃れるように気を失ったような気がしたが。いやあー性質の悪い夢だった。ははははは

ガチャッ

「ただいまー」

は？

「あ、起きた？今からご飯作るからもうちょっと横になっただけだよ」

そんなことを言いながら何やら荷物を持って、中に入ってくる佐々

良氏。なんかスーツカバーが見えるのだが。何故スーツを持っているんだ。

「ああスーツ？明日ここから出勤するから家から持って来たんだ」

笑顔でさらりとそう言った佐々良氏は荷物を置くと、キッチンへ向かった。

手際良くささつと作ってテーブルに二人分をセッティング。

「朝だしこんなもんで良いよね？美保菜ちゃんは、パンよりご飯派でしょ。炊きたてだから安心して」

何で、何で、何でっ！

「何で夢じゃないの！！！！！」

私の思考回路は爆発した。

「訳が分からないんです。昨日から佐々良さんは私に対してよくわからない言動をとるし、キャパオーバーなんですよ！どう対処したらよいのかわからないですよ！もうやだ！うわあー」

ぎゃーぎゃー喚いていたら何だか泣けてきた。

泣いたのはプレイ中のゲームのハードが唐突に故障し、セーブデータが一気に吹っ飛んだ時以来である。あれマジで泣けた。

本当はもっと文句を言ってやりたいのだが、嗚咽で言葉が出てこない。

いや、今はこの泣きじゃくること磨きのかかった不細工顔を見せつけるときのだ！

どうだ佐々良氏！この見るに堪えない醜い面！うわーん！

しかし残念なことに佐々良氏のほうが上手だった。

「やばい、萌えた」

.....は？

涙が一気に引っ込んで、それまではばやけていた佐々良氏を見ると何故だか頬を染めていた。

そして、それはだんだんと近づいてきて、

「うっ」

タツクルをするように抱きしめられて、そのまま後ろにあったベッドにダイブした。

ベッドの上で仰向けになっている私と、その上にのしかかっているという佐々良氏という図。嫌な予感しかない。

嫌な予感は早速的中した。

佐々良氏はまず私の目元に残る涙を舌で掬うように舐めた。そして今度は頬に残る涙の筋を舌でたどった。それを左右で行った後、不敵に笑う。

「しょっぱい」

鳥肌が立った。

佐々良氏は私の顔にかかる髪の毛を払いながら言う。

「せっかく昨夜も美保菜ちゃんがあまりにも震えているから寸でこのところで止めたのに。そんな可愛くされたら俺の堅固な理性もたないよ」

「り、せい？」

「そう。だからごめんね、美保菜ちゃん。全部、俺のモノにするから」

その笑みは艶やか過ぎて、私には刺激が強すぎた。

何も言えなくなった私はその後されるがまま。

私の口の中で蠢く佐々良氏の舌の感触を皮切りに、私には初めてづくしのことが待ち受けていたのだった。

要するに食われた。

肉食動物（後書き）

間が空いて申し訳ありませんでした。

逃げられない(前書き)

短いです

逃げられない

「何か欲しいものある？」

「……のみのものがほしいです」

わかった、と言って佐々良氏はベッドから出て行った。

精神的にも肉体的にも疲れきった私は、自力で起き上がる気力もなく、佐々良氏に頼りつきりだ。

まあ主たる要因だから当たり前のことでもある。

流石に、私は佐々良氏のことを信じることにした。

だって、嫌がらせで私と肉体関係を結ぶなんて相当の手練だ……手練ではないよな？

「持ってきたよ」

水を入れたコップを片手に爽やかな笑顔を見せる佐々良氏。

アレの時も佐々良氏はすごく優しくかった。

経験のない私でもわかるくらい、大切に扱ってくれた。

「身体起こすよ、きつかったら言ってね」

これで全てが偽りだったと言われたら、私は本格的な人間不信に陥ることだろう。

一度身体を重ねただけで、相手を信じて受け入れるのを軽薄なことを思う人もいるかも知れない。

しかし私は身をもって知ったのだ。

このへんた……佐々良氏が本気であり、そして逃げられないということ。

アノ時、僅かに額が汗ばんでいた佐々良氏は言った。

「俺、欲しいと思ったモノは絶対に手に入れる主義なんだよね。手に入れたモノは最後まで手放さないから、安心して？」

妖しい光を宿したその瞳を見て、既に何となく察してはいたけれど、はつきりと逃げることは出来ないのだなとわかった。

それだったら甘んじて受け入れるしかない。

と、言うかむしろこれは幸運なのでは？

だって、出世頭だし。見た目も申し分ないし。出世頭だし。なんと現金な私。

コップを両手で持ち、水を流し込む。

渴いていた喉がすぐに潤って、気持が良い。

一気に飲み干してしまった。

もう一杯欲しいかも……ん？何かお腹のあたりがくすぐつたい。

「……あの、身体を触らないでください」

「無理」

今の姿勢はと言うと、座る私の後ろに佐々良氏も座っていて私が佐々良氏に凭れかかっている状態である。

たしかに楽な姿勢ではあるけれど、相当なリスクを伴うということが判明した。

今度からは気をつけよう。

「ねえ、もう一回良い？」

「ごめんなさい、勘弁してください、許してください、頼みます」

訂正、非常に危険度が高い、でした。

逃げられない（後書き）

これにて第1部終了です

第2部は全く手をつけられていない状況なので、いつになるかわからないですごめんなさいです

始めるころには（仮）がとれているといいなー

公衆の面前で（前書き）

だいぶ更新が遅れてしまいましたすみません
そしてこの短さ…重ねてすみません

公衆の面前で

朝の満員電車。通勤するサラリーマン・ウーマンがぎゅうぎゅうと詰め込まれた電車は、おデブちゃんにとってはとても心苦しいものでもある。

既にキツキツな電車内に入ろうとすると、お前みたいなのは乗る資格など無い！と言わんばかりの痛い視線は、何度浴びせられても慣れぬものである。

混雑が和らぐ時間帯を狙おうとしても、朝が弱い私には長続きすることが出来ない。今流行りの自転車通勤をしようにも、会社に着く頃には体力は皆無に等しい状態になっていて仕事にならない。

まあそんなわけで、朝はとても憂鬱なのですが……。

「……」

「ん？どうしたの、美保菜。俺の顔に何か付いている？」

なんやかんやで結局日曜日私の部屋に居座って、共に出勤することになった佐々良氏。

その佐々良氏は、この満員電車の中でドアに背中を預けている私を囲うように、私の顔の両脇にその両手を付いている。そう、少女漫画とかで見たことがある人もいるであろう、アレだ。

か弱くて、今にも折れてしまいそうな華奢な身体を、押しつぶされそうなヒロインの身体を守るために、学校の王子さまであるヒーローが身体を張って行うアレだ。

それを何故か私がしてもらっているという不思議。普通逆だろう。肉弾壁として活躍するであろう私が守られる対象に居ることはちゃ

んちゃら可笑しい。

私の考えは決して間違っていないはずだ。何故なら周りの人もとても不思議そうな顔をして私たちをチラチラと見ているのだ。

うつ、普段とは違う視線だが、やはり嫌だ。私は視線から逃げる為に顔を俯かせた。

残念ながら、私はこの状態がとても隙だらけであるということに、気付いていなかった。

俯いて、出来る限り身体を縮めて（私の出来る限りなので他者から見た場合完全に大きいとは思いますがどうぞ寛大な心でもって見てください）いる私を、悪魔（変態）は見逃さずに捉える。

ぱくっ

「ひっ」

何と変態佐々良氏は、私の耳をその唇で食むという変態行為をこの満員電車でやってのけたのだ！

固まる私と、周りに居てチラチラと私たちを見ていた一部の人々。それにも構わずに佐々良氏は私の耳を食むのを止めて、しかしその距離はとても近いままで囁く。

「美保菜のこと食べたい……今日は僕の家によろしく」

不吉な言葉を聞いて固まる私は、丁度降りる駅だったようで佐々良氏に引きずられるように降りた。入口を見ると、私同様固まった数人とそれを迷惑そうに且つ不思議そうに見る人たちが。

ああ、ごめんなさい。無駄に太ましいこと以外に私に非はないと思います。この変態に代わって謝らせていただきます。

大変申し訳ございませんでした。

公衆の面前で（後書き）

本当は佐々良氏視点を入れたかったんですが全く筆が進まずに挫折しました……無念。

特別編 夏の陣 一（前書き）

八月の中旬にあるイベントと言えは？と聞かれてお盆や花火以外の答えが見つからない人は読んでもあまりよくわからないと思います。

なんやかんやであの衝撃的事件から数か月が経ってしまった。

佐々良氏に公共の場での変態的言動を慎んでもらう代わりに、金・土・日はずっと二人で過ごすことを約束させられたことに関しては未だに納得はしていない。しかし、そんな日々を受け入れて、そんでもって楽しんでいたりする自分がいたりする。

ただだって、佐々良氏とはゲームは勿論だが、他にも好きな漫画が一緒だったりと、趣味が合うのだ。ここまでピッタリと趣味が合う人は中々いなかったたので、気がつかないうちに長い時間話していたりするなんてことが多々ある。

……まあ、昼夜問わず急に襲ってくることに關しては本当に勘弁してほしいが。

それ以外はいたって問題もなく、驚くほどのリア充生活を謳歌していたりする。数か月前までには微塵も思いつかなかった生活だ。

そして今日、土曜日なのだが、午後から二人で買い物に来ている。家や会社から遠いし、何より人の多い都会では中々知り合いに会う機会もない。普段ならば拒否をする、いかにもカップルっぽく佐々良氏が腕を私の腰に回すのを許していた。

「あれ？美保菜？」

一級フラグ建築士とは私のことだったようです。知らなかった。

呼びかけられた方へとゆつくりと顔を向けると、そこにいたのは……長い付き合いの友人である、円華^{まどか}だった。――円華^{まどか}とは高校生の時に部活が一緒になり、そこから付き合いが始まった。好きなジャンルはあまり被っていないけれど、所謂オタク仲間である。ちなみに彼女の守備範囲はBL（読んだり書いたり）とコスプレ（衣装を自ら作って自ら着る）だ。私とは逆でスレンダーで美人なために、そのコスプレ姿は素晴らしく、イベントでは彼女の周りに人が群がるのが常だ。

嗚呼、会社の人でなくて心底良かった。

「いやー久しぶりじゃん。そうだ今度の……」

固まった円華^{まどか}の視線の先は、私の隣。佐々良氏だ。驚きの色から、次第に爛々と輝く円華^{まどか}の目に嫌な予感が……。

「ちよ、え、もしかして美保菜の彼氏さんですか？うわーすごい美青年捕まえたのねアンタ。よくやったわ！背が高くて、髪もさらさらヘアーで、顔も中々整っていて……うーん、優しそうに見えて実は鬼畜系かな？完全なる攻めね。うん、あー創作意欲が湧いてきた！ん、ちよっともしかしてジャイメルのデュランコス似合うんじゃない？いや、完全に似合うよねえ！これは良い！うん。いける。よし、じゃあ私はレミリアで行こうかな。決定！あ、美保菜の彼氏さんはコスプレ興味ある？無くてでも強制的に参加させるけどね！じゃあ採寸するからうちに来て！すぐ近くだし、すぐ終わるから。良いでしょ？」

円華^{まどか}の弾丸トークに流石の佐々良氏も圧倒されたようで、呆けた顔をしている。まあ私もここまで興奮している円華^{まどか}を見るのは久々で、

ノリについていけないけど。
そんなこんなであつという間に円華^{まどか}の家に連行されて、私は大好きな洋菓子店のシュークリーム（賄賂）を食しながら、目の前で繰り広げられる無駄のない動きで採寸する円華^{まどか}と為すがままの佐々良氏を見物した。いつも佐々良氏に振り回されている身としては、なかなか面白い見世物であつた。ふふふ。

採寸もあつという間に終わり、早速衣装作りに取り掛かるというところで円華^{まどか}の部屋から追い出された私たちは、時間も時間だったので佐々良氏の家に帰る（…）ことにした。

「面白い人だつたね。イベントは8月の13日だけ。ちょっと楽しみなあ」

帰ったらあのイベントの恐ろしさを一から叩きこまねばならんな、なんて思っていたのに。

「そういえば美保菜、俺が円華^{まどか}さんに圧倒されているのを見て楽しんでたよね……帰ってから楽しみだなあ」

生まれたての子羊が如くか弱い私は、抵抗する術など持っておらず、結局帰り際の魔の宣告は実行され、イベントについての心構えを説くことが出来たのは、日曜もお昼を過ぎてからなのでした。

特別編 夏の陣 一（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9939q/>

らんでぶー（仮）

2011年9月18日11時36分発行